
命の音

羽栗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命の音

【Nコード】

N0702B

【作者名】

羽栗

【あらすじ】

コナンの正体が蘭にばれるお話です。更新遅いですm（
つまらなかったらゴメンナサイ（
）；
）m

NO. 1 (前書き)

主人公いじめが好きなんです。ゴメンナサイ。(＜|＞) いじめます。(オイ?)

エンディングは今のところ、^^HAPPYEND^^ですが、まだ?わかりません?。

NO. 1

《バタツ!》

「っ!! コナン君!!!!!!」

買い物に行く途中の道で…、コナン君が倒れた…………。

(!どうしよう…熱があるじゃない…!!病院へ連れてかないと!)

私は病院までコナン君を抱えて必死に走った。

一米花総合病院—

「熱が40度程ありますねー……一応、入院させましょう。」
と医師は言った。

病室でコナン君の目が覚めるのを待っているとき、思った。最近、コナン君の様子が変だったな…と。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「どうしたの?最近、元氣無いんじゃない?」

「…そうかなあ…?いつも通りだと思うけど…?」

「コナン君、何か変よ?」

「そんなことないよ…!ボクなら大丈夫だから…!」

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

聞いても、返されてしまうのだ。

（あれ…？ここは…病院…？でも…俺は何でここに？……ん？蘭？）

「もっと…早く気付いてあげれば良かったのに…ごめんね……コナン君……」

（蘭…）

「僕…の方…こそ…、心配かけて…ごめ…なさい……。…だからっ…蘭姉ちゃ…泣かないで…！」

（クソッ！！息切れして、上手く喋れねえ…）

「！！！！コナン君、起きてたの？…ごめんね？？私…泣いてたんだ…。」

熱で息苦しそう…。

そんなの…見てられない。

見てられないけど…自分をもっと早く気付かなかったから、いけないんだよ……。

本当にごめんね……。

「…ごめんね……早く元気になってね！」

「うん！」

笑顔で言った。そしたらコナン君、返事した後、安心したように寝ちゃった。

コナンが寝た後、医師は蘭に

「解熱剤を投与しておきましたから、心配は無いと思います。明日には退院出来るでしょうね。」

と、言った。

蘭は安心した。だが、

「あっ！いけない…！お父さんにこの事、言ってなかったんだっけ！？」

そう。知らせてないのだ。

「コナン君寝てるし、どうしよう…。メモ残しとけば大丈夫だよね？……ごめんね。コナン君。…明日、また来るから。」

蘭はコナンが心配だったが、明日には退院出来ると聞いたし、家には何も知らない小五郎がいるから、帰ることにした。

—毛利探偵事務所—

「ただいまあ。」

「おう、蘭。随分遅かったな。何時間買い物してる…ってあれえ？お前、コナンと買い物してたんじゃない？コナンと荷物はどこだよ？」
コナンがいないのも荷物が無いのも当然だ。行く途中だったのだから。

「うん…。それがね……………」

同じ頃、

—米花総合病院—

「なあ…何で病院なん？蘭ちゃんトコちゃうの？なあ、平次っ！ウチら、何しに来たん？」

「やかましい！！…ここは病院やで？もっと静かに出来んかいっ！」
「そう言う平次かて静かちゃうやん！！大体な！『東京行ってくるわ』言うから、蘭ちゃんトコや思て付いて来たったっちゅうのに…」

始まってしまった。

あのうるさい痴話喧嘩が…。

「誰が付いて来い言うたんや？和葉が勝手に付いて来たんやろ？俺に文句言うなや！」

「お静かに。ここは病院です。」

前方から来た看護師に注意されてしまった。

「言わんこっちゃない……。和葉のせいで怒られてしもたやんけ……」

「うっさいわ……って……ん？」

和葉が何かを見つけた。

「どないした？」

「その病室……『江戸川コナン様』て書いてあるで？」

そう。見つけたのはコナンの病室。

「ホンマや！……って事は、工藤はここにおるんかいな！？」

（え？工藤君？コナン君やろ？……って今はそんな事、どうでもええ……！）

「え？知ったたんやないの？コナン君のお見舞いに来たんとかやうの？」

「え？ちゃうで？」

「ほな、何しに来たん？」

「この前の犯人の弟さんが何や知らんが俺の事、呼んでるんや。ここに入院してる言うてたし。せやから、来たんや？」

「そやったんか……。なあ、折角やしお見舞い行かへん？」

「そやな。」

二人はコナンの見舞いに行くことにした。

—毛利探偵事務所—

「………って言う訳なのよ……。」
と、蘭。

「何でそんな大事な事を、もっと早く言わなかったんだ……！！！」

怒る小五郎。

「色々あって、忘れてたのよ。…でも、明日には退院出来るって医者が言ってたから大丈夫よ。」

悲しそうに…でも、どこか安心したような顔で話す。

「ったく…世話が焼ける奴だな。」

（俺は、忘れられたのか…!）

小五郎は

「忘れてたのよ」

と言う娘の言葉に、正直ショックを受ける。

—米花総合病院—

ここはコナンの病室。

（ん…? あ…そっか。俺、寝ちまったんだっけ…。）

目が覚めたコナン。（そういえば…さっきより、大分楽になってるよな…。）

《コンコン》

ノックの音がした。

「…はい。」

「あ…俺や! 服部や!」

「…どうぞ。」

《ガラッ》

「邪魔すんでー!」

「邪魔するなら…帰れ…。」

「はいよーっ! って何でやねん! …そんな事より…」

「コナン君大丈夫なん？」

和葉が口を挟んだ。

「う、うん。…大丈夫だよ。」

「お前…何で病院におんねや？」

「それは、こっちの台詞だよ。平次兄ちゃん」

和葉が居るので子供のフリをした。

「俺は、犯人の弟さんに呼ばれたんや。」

「コナン君は何でここに？」

「よく分からないけど、何か体調が悪いみたい…」

コナンは、何故自分が病院に居るのか、蘭から聞いていないのだ。

「大丈夫なん？」

「少し休んだから、大分楽になったよ」

「そうなんか…良かったなあー！ボウズ！ホンマに良かったわ！」

「コナン君。蘭ちゃんは居ないん？」

「そういえば…」

蘭がいない事に今気付いた。

「ここにメモ残してあるで。」

『コナン君へ

コナン君の事、まだお父さんに言ってないから、帰るね。お医者さん
も大丈夫って言ってたから。一緒に居てあげられなくてごめんね。
明日また来るから。おやすみ

蘭』

て書いてあんで。」

「そか。帰ってもうたんかあ。」

「俺、まだ用あるねん。そろそろ帰るわ。和葉、行くで。」

「何や、もう帰るん？忙しい奴やなあ…」

「ほな、元気だな」

「邪魔してごめんな…コナン君、お大事にな！」

「うん！ありがとう」

こうして平次達は帰った。

NO. 1 (後書き)

どうでしたか？

楽しんで頂けたら嬉しいです。

更新など、遅いと思います。ゴメンナサイ
よろしければ評価お願い致します。

NO. 2

一翌日一

「コナン君!」

「迎えに来ましたよ!」

「早く出てこいよ!」

なかなか来ないコナンを迎えに来た、少年探偵団十眠そうな哀。

「朝っぱらからうるせー奴らだな……」

上着を着ながら独り言を言う小五郎。

独り言が聞こえてしまった蘭が

「私は、元気で良いと思うけど?」

と言いながら探偵事務所から出る。

「蘭お姉さん、コナン君はどうしたの?」

と、歩美。

「ごめんね。今日はコナン君お休みのの。」

「風邪ですか?」

光彦が聞く。

「おい、余計な事言ってるで、早く病院に行くぞ」
小五郎が口を出した。

「何故、病院に行くのですか?」

「……………」

コイツらに話すとまたうるさくなる……と思い何も言わない小五郎。

「もしかして…江戸川君は……病院にいらって事?」

何と哀の予想は的中。

「!!!!!!」

何故分かる!?

「え…じゃあコナン君は…やっぱり……………そうなの!!!!?」

「……………」

「なんとか言ったらどうだよ!?!」

小五郎を攻める少年探偵団。

しょうがない、と思い蘭が小五郎を助ける。

「そうなのよ……………。体調が悪くて、ちょっと病院にいるんだ…。」

「オレ達も、一緒に行くぜ!」

「迎えに行くだけだ。オメーらは来なくても良い。早く学校行け!」

「そんな言い方…酷いよっ!!」 「そうですよっ! 仲間が大変なときに、顔も出さないなんて、非常識ですよ!」

どうやら、何が何でも行くつもりのようなのだ。

「ありがとう…気持ちだけで、コナン君喜ぶよ? だけど、寝込んでる姿、見られたくないと思うんだ。」

「でも……………」

「ねっ?」

「わかりました…」

さすが蘭。

蘭の説得に、とうとう少年探偵団も折れた。

一米花総合病院

ここはコナンの病室。

「コナン君? おはよっ!」

「蘭姉ちゃん、おじさんも、おはよー。」

「おう。…お前…体調、大丈夫なのか?」

小五郎も何だかんだ言いつつ、実はコナンの事が心配だったりする。

「うん…大丈夫だよ」

でも、実は辛い。

「でも：何か、ものすごく顔色悪いよ？」
心配する蘭。

「大丈夫だよ：！」

辛いのに、心配をかけたなくて話をそらす。

「ねえ、そういえば：僕って何でここにいるの？」

「お前、覚えてねえのか？」

「うん：」

（買い物に行く途中だったってことは覚えてんだけどな。）

「：コナン君、買い物に行く途中で倒れたんだよ。それで、すごい熱があって：ここに。」

「そっか：ごめんなさい：。あつ、昨日ね、平次兄ちゃんと和葉姉ちゃんが来たよ。」

「え？何で来たの？」

「何か、犯人の弟さんに呼ばれて、そしたら僕の病室見つけたんだって。」

「ふーん。和葉ちゃんは、何か言ってなかった？」

「特に何も：。何か急いでみたいだし：。」

「話もそこらへんにしろ。その点滴が終わったら退院して良いってよ！」

小五郎が話を切り上げた。

「んじゃ：、蘭。あとは任せたぞ。俺は飯食いに、食堂に行ってくる。」

一時間後

「お父さん！：！コナン君が：大変：！：！」

「何だと？」

小五郎と蘭は、急いでコナンの病室に向かった。

小五郎が病室の扉を勢いよく開けた。

《ガラッ》

「コナン!! どうした!？」

「お…じ…さ…?」 何だか辛そうだ。

「おい!?! どうしたんだよ!?!」

「また…、熱が上がってきて…。」

小五郎の問いに、蘭が答える。

「コナン? 大丈夫か?」

「…じよ…ぶ…だ…よ…:…:…」

とは言うものの、話すだけで精一杯に見える。

「蘭! ナースコールだ!!」

「うん!!!!」

蘭はナースコールで医者を呼んだ。

「コナン!! しっかりしろ!!」

「コナン君! 頑張って!! もうすぐ、お医者さん来るから!!」

しかし、医者が来たときには既にコナンの意識はなかった。

「ちょっと、よろしいでしょうか?」

話がある、と呼ばれた小五郎と蘭。

「確かに、解熱剤を投与しました。点滴も打ちました。」
と、医者が言う。

「じゃあ、何で…:…:…」

蘭の言葉に小五郎も頷く。

「まだ詳しいことは分かりません。…今している、血液検査の結果が出るまで…:…:何とも。」

NO. 2 (後書き)

どうでしたか？未熟者ですが、これからもよろしくお願いします。

No. 3 (前書き)

またまた、遅くなりました。えー前はすみませんでしたm〔

m
終り方が中途半端になってしまつて。今回は結構、良い感じではな
いかと思います。

No. 3

雲に覆われ、灰色に染まった 曇り空。

真っ白に光る綿がしんと 天から降りてくる。

その様子を退屈そうに見ていた人がいた。

彼の名は江戸川コナン。

数日前に倒れてからは病室で過ごしている。

「……つまんねえ」

こんな時に蘭がいたらな、と 何度思っただろうか。

数分後、コナンの願いが叶うかの様にして蘭が病室を訪れた。

「コナン君、元気？」

彼女の明るい笑顔が全てを和らげる。

「うん。全然元気。」

実は36.9度の微熱があったりして少しだるいが、所詮は微熱だろ、と軽く考え返事をするコナンの頬はうつすらと赤く染まっている。

その様子に蘭は顔をしかめて、コナンの額に手を当ててみる。

（やっぱり……）

「……どこが全然元気なのよ？ 熱あるじゃない」

「ご、ごめんなさい……でも、大したことないよ。」

（ハハハ……やっぱ蘭は誤魔化せねえな）

「も……体調の事はちゃんとと言わなきゃ駄目よ？」

あ。そういえば、と蘭が思い出した様に言った。

話は5分前に遡る。

探偵事務所でのこと。

「おい、おっちゃん！聞いてんのかよ！！」

「お願いしますっ」

「歩美たちも連れてって！」

実はコナンのお見舞いに付いて行くため、元太達が事務所に押し掛けていたのだ。

何故、蘭達と一緒に来なかったのかというと、見舞いの品を買ってから来るらしい

と蘭から聞かされたコナンの反応は

「ふーん。」

これだけである。

内心は、うるさくなるな、絶対。と苦笑いをしていた。

その頃、小五郎は医師と話していた。

「先生、話とは？」

「コナン君の事についてですが…」

そう言った医師の表情が険しくなった。

「検査の結果が出ました…」

「……………」

表情の険しさが一層、深まっていく。無言のまま、様子を伺っていた小五郎はゴクリと生唾を飲む。

「……………」

「…未発見の病…かもしれないんです…。」

小五郎の眉間にシワが寄った。

一体何を言っているのか、この医者は。と言いたげな面持ちで。
「…どういう意味ですか？」

それでも空気はピン、と張り詰めていて、
現在動くものは、小五郎の頬を伝っていく水滴のみ。

「結果はこれです。」

と言いながら、字で埋め尽された一枚の紙を小五郎に見せ付けた。

「この結果を見る限り、異常な箇所は無に等しいですね。」

「ですが、先生は未発見の病かも…」

「それは、あくまでも血液検査だけでの結果です。」

小五郎の声を遮って医師が言う。

「結果に問題はありませんでしたが、症状が出ているのですよ。」

「でも、原因が見つからない病なんていくらでも…」

「現在知られている病にはそういう種類のものもありますね…ですが、コナン君の病は全てが解らないことだらけなのです。」

一時、沈黙が続いた。それを破ったのは医師の方で。

「コナン君のご家族は？」

「せ、先生…それともう…助からないんですか…!?!？」

「…今のところ、何とも言えませんが…その確率が0とは断言出来ません。」

それで、コナン君のご家族は今、どこに居るのです？」

「コナンの家族がどこに居るのか何て知りません。…今は私の家族ですから。」

小五郎はそれだけ言い失礼します。と、一礼して部屋を後にした。

No. 3 (後書き)

どうでしたか？

後味が悪いようなら、なんなりとご意見下さい。

アドバイスなどのコメントお待ちしております。良かったら、評価の方もお願いします（＜人＞）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0702b/>

命の音

2010年10月9日04時04分発行